

# 国家・戦争・アイロニー —ランドルフ・ボーンの *Untimely Papers* を中心に—

田 野 勲

1

文化思想史的な観点からすれば、アメリカの1910年代はなかなか興味深い時代である。10年代には、アメリカ全土から、さらには、ヨーロッパから、多くの前衛的な思想家や芸術家がニューヨークに押し寄せてきて住みつくことになったのだが、その中心になったのがグリニッチ・ヴィレッジであった。というのも、グリニッチ・ヴィレッジ周辺では家賃も物価も安くて比較的楽に生活ができたし、さらに、これらの自由奔放な思想家や芸術家を快く受け入れてくれる溜り場が、つまり、カフェやサロンがたくさん存在していたからである。そのなかで代表的なものが、ワシントン広場の筋向かいにあったリベラル・クラブであり、五番街23番地にあったメイベル・ドッジのサロンであり、五番街291番地にあったA. スティーグリッツが主宰していた画廊「291」であり、さらに、少し離れてはいたが、ウエスト・サイドの67丁目にあったアーレンズバーグの邸宅であった。これらのサロンで、無名だが、才能豊かな思想家、社会活動家、芸術家、作家、詩人たちが、具体的に名を挙げれば、たとえば、マックス・イーストマンが、ジョン・リードが、フロイド・デルが、アルフレッド・スティーグリッツが、サダキチ・ハートマンが、マン・レイが、シャーウッド・アンダーソンが、ユージン・オニールが、エドナ・ヴィンセント・ミレーが、交流し、議論し、互いに切磋琢磨しながら、それぞれがそれぞれの独自の世界を開拓しようとしていたのである。それがいかなる時代であったのか、それを具現化したのが、一例を挙げれば、1913年に開催された国際現代美術展、いわゆる、アーモリー・ショーであった。これを主催したのはアメリカ画家彫刻家協会であり、その中心は会長であり、画家集団 **The Eight** の一員であったアーサー・デイヴィスであった。最終的には約1300点の作品が出品されたが、そのうちの約400点は外国、特に、フランスからのものであった。そして、当然ながら、人々の興味を引き、話題になって、もてはやされたのも、これらのフランスから出品された作品群であった。とりわけ、アンリ・マチス、パブロ・ピカソ、マルセル・デュシャンらの大胆で前衛的な作品が会場を席卷し、話題を独占してしまった。換言すれば、皮肉なことだが、アーモリー・ショーは **The Eight** を含めたアメリカの絵画、彫刻の後進性を歴然と暴露することになったのである。そうした事態を受けて、アメリカのアカデミックで保守的な画家や評論家が反

発し抗議したのは断るまでもない。その結果、これを支持する者、たとえば、A. スティーグリッツらと、これを否定する者、たとえば、ケニオン・コックスらの間で熾烈な論争が行われることになった。むろん、時代の趨勢からしても、A. スティーグリッツ側が優勢であったが、問題はそうした論争の帰趨よりも、そうした論争が行われたという事実自体である。つまり、アーモリー・ショーとはアメリカの芸術史上それほどまでに斬新で重要な出来事だったのであり、1910年代が歴史的に画期的と書いていくくらい活気に溢れ、創造的な時代だったことを証し立てるものだったのである。10年代を代表する思想家の一人であるランドルフ・ボーンは同じ1913年に出版した『青春と人生』のなかで、次のように書いているが、それはそうした1910年代の本質を的確に表わしていると言っている。

荒々しい青春から、見事な沈殿物が生じるのだ — 大胆に実行するという、健全で、強固で、攻撃的な精神が生じるのだ。それは、新しい思想を喜んで迎え、経験に鋭い洞察力を働かせる、柔軟で成長する精神でなければならない。自己の反応を、暖かい真実のものにしておくことは、永遠の青春の秘訣をすでに発見したことであり、永遠の青春とは救いなのである。<sup>1</sup>

だが、悲しいことに、青春は永遠には続かない、つまり、「救い」にはならなかった。突如、暗雲が立ち込めて、この晴れやかで、活気に溢れた時代も、一挙に、苦悩に充ちた、絶望的な時代に転じてしまうのである。言うまでもなく、その暗雲とは14年に勃発した第一次世界大戦である。アメリカ本土が戦場になったわけではなかった。だが、この大戦はアメリカに対して、政治的にも、経済的にも、そして、言うまでもなく、文化的にも、深刻な影響を及ぼすことになったのである。それがいかなるものであったのか、R. ボーンを中心に考察したいと思っている。

ここではまずこの第一次大戦がいかなるものであったか、その事実を確認しておくことにしよう。いま現在でもそうであるが、20世紀の初頭においても、バルカン半島は政治的にきわめて混沌として不安定な地域であった。ボスニアとヘルツェゴヴィナは、西側はドイツ、オーストリアに、そして、東側はセルビア、ロシアに挟まれており、長い歴史の流れの中で、常に東西の両勢力が対峙しぶつかりあう戦場となってきた。1914年6月、そうした一触即発の危機的な状況のなかで起こったある一つの暗殺事件が誘因となって第一次大戦が始まることになったのである。1908年以降、オーストリアがボスニアとヘルツェゴヴィナを併合してきたが、ここはもともと民族的にも文化的にもスラヴ系であったので、セルビアも併合を企ててきたところでもあった。1914年6月、オーストリア政府は、意図的にこの地を選んで、陸軍の大演習を行った。オーストリア皇太子

フランツ・フェルディナンド大公夫妻は観閲のためにボスニアの州都サラエヴォに赴いたのだが、6月28日、オーストリアの支配に反対するセルビア人の秘密結社員に狙撃されて凶弾に倒れた。その後、それぞれに利害が交錯しているドイツ、イギリス、フランス、ロシアを巻き込みながら、オーストリアとセルビアの間で活発な外交折衝が行われたが、結局交渉は成立せず、1914年7月28日に、ついに、オーストリアはセルビアに対して宣戦布告をすることになったのである。この段階ではこれはまだ局地戦争でしかなかったが、その後、関係各国の利害が絡んで、8月1日にはドイツがロシアに宣戦し、8月3日にはドイツがフランスに宣戦、翌8月4日にはイギリスが、ベルギー侵攻にたいして、ドイツに宣戦することで、この局地戦争はいっきにヨーロッパ戦争に、さらには、それに止まらず、さまざまな政治的経済的な要素が複雑に積み重なってきて、アメリカ、インド、さらには、極東にまで飛び火し、ついに、連合国と同盟国が対峙する世界大戦にまで拡大していくことになったのである。



マン・レイ：戦争 (1914)

われわれの立場からすれば、ここで問題になるのは、アメリカがこの第一次世界大戦とどのように関わるようになったかということである。むろん、アメリカの国土そのものは戦いの場にはならなかったのだが、20世紀に入って、アメリカは政治的にも、経済的にも、列強国のひとつになろうとしていたし、さらに、アメリカは国の成り立ちからして人種の坩堝であり、その結果、それぞれの出自によって、多くのアメリカ人はヨーロッパでの戦闘に無関係ではありえなかった。直ちに、親連合派、親ドイツ派、親中立派が出現して、彼らの間に軋轢が生じ、激しい論争が行われることになった。そうした状況の中で、8月4日、イギリスがドイツに宣戦布告したまさに同じ日に、W. ウィルソン大統領はアメリカの伝統的な孤立主義を踏襲して、中立主義を宣言したのである。それが具体的にいかなるものであったかは、8月19日にウィルソンが上院に送付した次のような声明から窺い知ることができる。「合衆国は名実ともに中立でなければならない。

我々は行動においても、思想においても、不偏不党でなければならないし、そのためには感情をしっかりと抑制していなければならないのだ。」このように、ドイツのベルギー侵攻という事態を前にして、ウイルソンが選んだのは、宣戦布告ではなくて、孤立主義であり、中立主義であった。これが1914年、第一次世界大戦発生当時の、ウイルソンの、そして、アメリカの基本的な姿勢であった。

その後、ヨーロッパ戦線はどうなったのであろうか。ドイツはシュリーフェン計画に則って短期決戦を目論んだが、東部戦線へ一部戦力を割かざるをえず、マルヌの戦いで敗北を喫したが、一方、連合国側も十分な戦力が備わっていなかったのでいきまに攻めきれず、戦線は一進一退の膠着状態に推移していった。その間、アメリカは中立主義を標榜してはいたが、連合国との通商は維持しており、食料品や弾薬などを輸出して、経済的には潤っていた。むしろ、ドイツがそうした敵対活動を見過ごすはずはない。ドイツはそれを阻止するために潜水艦による船舶撃破を宣言した。たとえば、15年5月7日に、ドイツのUボートがイギリス船ルシタニア号を撃沈した。この時、約1000名の犠牲者がでたのだが、そのうち128名がアメリカ人であった。これは一事例に過ぎないが、こうした惨劇が繰り返されるにつれて、アメリカ国内では、反ドイツ感情が高揚し、ドイツに対する抗議の声が沸きあがり、各界から軍備拡張が声高に叫ばれるようになっていくのである。そして、これが重要なのだが、その結果として、中立主義の理解に、微妙な、だが、重要な変化が現れてくるのである。ウイルソンは中立主義の立場を堅持しようとしてはいたが、そうした軍備拡張を求める声を無視することもできず、16年1月には、軍備計画を発表せざるをえなくなった。つまり、ウイルソンはここで戦争準備(Preparedness)を決断する。それも、彼によれば、「戦争を避けるために」。これはどう見ても奇妙な論理なのだが、それまでのウイルソンの主張を考えれば、こうした但し書きも理解できなくはない。ただここで確認しておかねばならぬのは、この時点で、ウイルソンが、そして、アメリカが重大な一歩を踏み出したということである。

ヨーロッパ戦線では2月にはヴェルダンで、7月にはソンムで、歴史に残るような激戦が行われたが、全体としては相変わらず一進一退が続いていた。一方、アメリカでは「戦争を避けるため」という口実の下で、着実に戦争準備が、つまり、戦時体制の構築が進められていった。たとえば、8月29日には大海軍法案(Big Navy Act)が、そして、9月7日には船舶令(Shipping Board Act)が成立しているが、前者は戦艦建造のための法令であり、後者は船舶の購入と建造のための法令であった。その間に、ウイルソンは再選を果たし、12月には、全交戦国に和平交渉を促す文書を送付したが、その努力も実を結ぶことはなかった。そうした事態を受けて、ウイルソンは17年の1月22日にあの有名な「勝利なき平和」の演説をするのである。周知のように、その骨子は民族自決、海洋の自由、軍備の縮小、勝利なき平和、世界平和機構の設立であったが、これ自体は

特別目新しいものではなく、すでに社会主義者たちが主張していたものであった。さらに、これはある意味で当然なことだが、ヨーロッパ各国の指導者たちはすでに人的にも物的にも甚大なる損害を蒙ってきていたので、簡単にはこの「勝利なき平和」論を容認しなかった。このようなさまざまな困難な問題があったにしろ、それでも、この演説はじつに印象的かつ効果的であり、その結果、ウイルソンは聖なる平和の使徒に祭り上げられていくのである。だが、ドイツはそうしたウイルソンの意思を踏みにじるかのようになり、戦闘区域では、どの国の船舶であれ、武装していようがまいが、無差別に攻撃すると通告し、現実には、無差別攻撃を実行したのである。さらに、ドイツの外相ツィーママンの秘密文書が発覚した。これはツィーママンがメキシコ大統領カランサーに宛てて書いたもので、その中で、ツィーママンは同盟の見返りに、ニューメキシコ、アリゾナ、テキサスの割譲を約束し、さらに、日本を説得して、ハワイを与えるから、アメリカと戦うようにしてくれと依頼していたのである。こうした事実が次々と暴露され、さらに、議会からの強力な突き上げも加わって、ついにウイルソンは不本意にも中立主義を放棄することを余儀なくされることになったのである。

17年4月2日、新議会の第一日に、ウイルソン大統領はあの歴史的な演説を行なった。かれは「世界は民主主義のために安定されなければならない」と基本的な立場を表明した後で、この演説を次のように結んだのである。

この偉大な平和な人民を、あらゆる戦争の中でもっとも恐ろしくまた悲惨な戦争に導くのは恐ろしいことであり、文明はそれ自体平衡状態にあると思われる。しかし、権利は平和よりも高価であって、われわれはつねに忘れたことのないもののために戦うであろう — 民主主義のために、自分たちの政府がはっきりとした意見をもつように専門家に委任している人たちの権利のために、小国の権利と自由のために、あらゆる人民に平和と安全をもたらし、最終的には世界そのものを自由にする自由な人々との協力によって全世界を支配するために。そのような使命に、われわれは生命と財産とを、われわれの全存在と所有するすべてとを捧げることができる。誕生と幸福と大切にしている平和とを与えてくれる主義のために血を流し、力をつくす権利をアメリカが与えられる日が訪れたのを知っている人たちだけがもつ誇りをもって。神の助けを受けて、アメリカには他にとるべき道はない。<sup>2</sup>

このドイツ帝国に対する宣戦布告を、上院は4月4日に、下院は6日に可決し、その日の午後、ウイルソン大統領は深い悲しみのうちに宣戦布告書に署名した。つまり、ここでアメリカは正式に第一次世界大戦に参戦したのである。

## 2

ここで確認しておかねばならぬのは、アメリカが参戦したからといって、直ちにアメリカ軍がヨーロッパ戦線に馳せ参じて戦闘に加わったということにはならないことである。先に述べたように、アメリカは16年の1月から戦時体制の構築を始めてはいた。そのために、大海軍法案や船舶令を成立させ、戦艦や船舶の建造に取り組んできた。だが、公式には中立主義を標榜してきたこともあって、参戦の時点では、そもそもヨーロッパで戦うべき軍隊自体が十分に整備されてはいなかったのだ。最初の歩兵師団がバリーに到着したのは3か月後の7月4日であったが、この事実はアメリカの戦争準備(Preparedness)がけて十分なものではなかったことを如実に示している。そうした状況を受けて、ウイルソンは戦時体制の構築に邁進する。これが熾烈な「国内の戦争(War at Home)」を引き起こすことになり、この「国内の戦争」こそが、この論考の主要なテーマなのだが、まずはこの戦時体制の構築がいかに行なわれたのか、その推移を確認しておこう。

モリソンはオックスフォード版『アメリカの歴史』のなかで、ウイルソンが「人々に戦争を愛し敵を憎ませようとする恐るべき宣伝運動を大目に見た」と指摘した後で、次のように書いている。

議会によって設置された世論調査委員会会長のジョージ・クリール(George Creel)は、バーナード・バルークが工業力を動員したように、またベーカー陸軍長官が人力を動員したように、アメリカ人の感情の動員に着手した。美術家、広告主、詩人、歴史家、写真家、教育家、俳優達はキャンペーンに組みこまれ、国は印刷物にあふれ(ラジオを個人で持っている者はまだごくわずかであった)、約7万5千人の「4分間男達」(戦時公債の販売を促進するための演説をした人々—筆者注)は映画館や公的集会において演説の弾幕を張った。観衆を戦慄させるために「ドイツ兵」の野蛮さを暴露した映画、専門家と思われる者の手でドイツが墮落の一途をたどったことを実証するべく書かれたパンフレット、新聞連盟提供の無数の社説が、平均的人間がなにを考へるべきかを教えた。<sup>3</sup>

ここでウイルソンの信奉者であったG.クリールが行なった「感情の動員」とはいわゆる「戦争熱(War mania)」の喚起であり高揚のことであるが、それがどのようにして行なわれたのかを検証しておこう。まずここでモリソンが「教育家」と言及しているなかに、ジョン・デューイなどの知識人達が含まれていることは間違いなし、R.ボーンはまさにそれらの戦争に加担した知識人達と対峙し痛烈に批判することになるのだが、それはあとで詳述することにして、さしあたって、ここでは「感情の動員」のため

に、詩人、音楽家、そして、美術家が具体的にどのように貢献したのかを見ておくことにしよう。

ジョン・リードは *The Masses* の17年4月号に寄稿した『誰の戦争?』という記事の中で、「劇場で人々はジョージ・コーアン (George Cohan) やアーヴィング・バーリン (Irving Berlin) が作曲した愛国的なバラードを歌い、国歌を演奏し、国旗と苦悩するリンカンの肖像画を振り回している」と書いているが、ここで名前が挙がっている G. コーアン (1878-1942) と I. バーリン (1888-1989) は二人とも当時著名なる音楽家たちであった。

まず G. コーアンだが、かれは多彩な才能の持ち主で、ユージン・オニールと親交のあった劇作家であり、舞台役者であり、そして、ソング・ライターでもあった。一説によれば、生涯を通じて、40の芝居を書き、1000以上の舞台に登場し、500を超える歌を作曲したと言われている。そんな G. コーアンが、17年、アメリカの参戦前後の燃え盛る「戦争熱」のなかで、作詞作曲し、かれの最大のヒット曲になったのが、*Over There* であった。ここではその一部を紹介しておくことにする。

Johnnie get your gun, get your gun, get your gun,  
 Take it on the run, on the run, on the run,  
 Hear them calling you and me;  
 Every son of liberty  
 Hurry right away, no delay, go today,  
 Make your daddy glad to have had such a lad  
 Tell your sweetheart not to pine,  
 To be proud her boy's in line.

Chorus:

Over There, over There  
 Send the word, send the word,  
 Over There  
 That the Yanks are coming,  
 The Yanks are coming,  
 The drums rum tumming everywhere  
 So prepare,  
 Say a Prayer  
 Send the word,

Send the word to beware  
We'll be over, we're coming over,  
And we won't be back till it's over over there!

次に、I. バーリンであるが、かれは名実ともに20世紀のアメリカの音楽界を代表するソング・ライターである。かれはユダヤ系の移民で、正式な音楽教育を受けたことはなかったし、楽器も満足に演奏することもできなかったが、カフェやミュージック・ホールで、ウェイターとして働きながら、歌っているうちに、次第に音楽の才能を開花させ、1910年代に入ると、アレンジャーとの共同作業を通じて、作詞作曲家として活躍し、次々とヒット曲を発表するようになった。たとえば、*Alexander's Ragtime Band*, *Easter Parade*, *White Christmas*, *God Bless America*, *There's No Business Like Show Business*などの曲は、今でも歌い継がれているものであるが、これらすべてがI. バーリンが作詞作曲したものであることを考えれば、かれがいかに偉大なるソング・ライターであったかがわかるだろう。そんなI. バーリンはアメリカ参戦前後に戦意高揚のために多くの曲を作曲したが、そのひとつが *For Your Country and My Country* であった。その歌詞は次の通りである。

We know you love your land of liberty  
We know you love your U.S.A.  
But if you want the world to know it  
Now's the time to show it  
Your Uncle Sammy needs you one and all  
Answer to his call

Refrain:  
For your country and my country  
With millions of real fighting men

It's your duty and my duty  
To speak with the sword, not a pen

If Washington were living today  
With sword in hand he'd stand up and say



For your country and my country  
I'll do it all over again

紙面の関係でほんの2曲、それも、その一部しか紹介できないが、これらの歌詞から、J. リードが述べていた「愛国的なバラード」がどのようなものであったかを推し測ることはできるだろう。これらの無数に作曲された「バラード」のキーワードは「合衆国」「国」「自由」「戦士」「銃」「剣」であり、それが、単純だが、しかし、喚起的なリズムとあいまって、燃え盛る「戦争熱」の中で、いまや群衆と化した国民の心を確実に捉え、戦意高揚のために大いに寄与することになったのである。

それでは美術家はこのような状況のなかでどのような役割を果たしたのだろうか。ここでは画家というより、むしろイラストレーターとして有名であったジェームズ・フラッグ (James Flagg) (1877-1960) について紹介しておく。J. フラッグは幼少の頃から天才ともてはやされており、信じ難いような逸話にも事欠かない。たとえば、ある雑誌にかれのイラストが初めて買い上げられたのは12歳のときであったし、さらに、すでに15歳の時には、かれは当時の一流誌であった *Life* と *Judge* の正式なスタッフに名を連ねていた。その後、画家として身を立てるべく、ロンドンとパリに渡って修業したものの、その資質がないことを思い知らされて、イラストの世界に復帰した。そんな J. フラッグはアメリカの第一次世界大戦への参戦前後に、45点の愛国的なポスターを製作したが、その中でもとりわけ有名なのがこの2点である。特に、アンクル・サムスのポスターは当時400万部も流通したと言われている。



すでに述べたように、ウイルソン政権が第一次世界大戦に正式に参戦したのは1917年4月6日であったが、それ以降、ウイルソン大統領は、文字通り、戦時体制の構築に邁進した。その重要な一翼を担ったのがウイルソン大統領の片腕であったG. クリールであった。かれは「感情の動員」、つまり、「戦争熱」の喚起と高揚に従事することになったが、その使命を全うするために動員したのが、G. コーアン、I. バーリン、J.M. クラッグといった当時の著名なる詩人、音楽家、美術家たちであった。かれらはそのほんの一部に過ぎないが、かれらによる「人々に戦争を愛し敵を憎ませる」宣伝活動がいかなるものであったのか、そして、その結果、かれらが戦時体制の構築に大きく貢献することになったことは、これまでの検証から明らかであろう。

ウイルソンは「戦争熱」が吹き荒れる状況のなかで、戦時体制構築のために、一気に、しかも、強引に、様々な政策を推進した。主なものを紹介しておこう。17年4月16日に船舶法を成立させて、船舶の補充を計った。これによって、軍隊と物資の円滑な輸送が可能になった。次いで、5月18日に、ウイルソンは義務兵役制度法（The Selective Service Act）を成立させた。いわゆる、徴兵法である。これは21歳から30歳の男子に徴兵のための登録義務を課すものであったが、予想に反して、6月5日の時点で、960万人が登録し、終戦時には、登録年齢を18歳から45歳に拡大したことにもよるが、2420万もの人が登録した。6月15日には防諜法（The Espionage Act）が成立した。ここでは軍事機密の保護、諜報活動の禁止などが謳われていて、これらに違反した者に対しては、1万ドル以下の罰金と20年以下の禁固刑が規定されていた。さらに、1年後の18年5月16日には煽動罪法（The Sedition Act）が成立した。この法律により、合衆国公債販売の妨害、軍隊の補充に対する反対、憲法、国旗、さらに、軍服に対する不忠誠および誹謗などが取り締まりの対象になり、弾圧されることになったが、一説によれば、この法律により、1500人以上が逮捕されたとのことである。このような強権的な政策による統制強化に対して、当然ながら、リベラルな知識人、社会主義者、アナキストたちが抵抗し、抗議することになり、その結果、熾烈な「国内の戦争」が勃発することになった。それについてはあとで具体的に触れるとして、ここで確認しておくべきことは、こうした一連の弾圧政策を推進することで、18年の5月頃までには、ほぼアメリカの戦時体制が確立し、アメリカ軍の臨戦態勢が整ったことである。

すでに紹介したように、アメリカは17年4月に参戦を表明したものの、実際にヨーロッパ戦線に軍隊を派遣したのは3ヵ月後の7月であった。その後ヨーロッパ戦線は一進一退を続けていたが、全体的には、18年の3月くらいまでは、ドイツを中心にした同盟国が優勢に展開していた。ところが、その頃までに、アメリカの臨戦態勢が整い、大規模で、訓練された軍隊を戦場に派兵することが可能になっていたのである。ドイツ軍は3月から攻勢に転じ、5月には、パリに最接近し、爆撃を開始した。まさにそんな状況下で、

アメリカ軍の約30万の兵士が投入され、ドイツ軍の侵攻を食い止めたのである。それ以降は、アメリカ軍を中心にした連合国の連戦連勝となった。6月のペロー・ウッドでの勝利。7月のマルヌの戦いでの勝利。9月のサン・ミエールとアルゴンでの勝利。その結果、アメリカを中心とする連合国側の勝利が決定的になり、ドイツも停戦交渉に応じざるをえなくなった。当事国間の利害が複雑に絡んでいたために折衝は難航したが、18年の11月11日に、ついに終戦を迎えることになったのである。

### 3

これまでの考察により、第一次世界大戦がいかなるものであったか、そして、アメリカがそれとどのように関わったのかは明らかになったはずである。次に問題になるのは、たびたび指摘してきたことだが、その過程で起こった「国内の戦争」がいかなるものであったのか、そして、R. ボーンがそれにどのようにコミットしていったのかということである。

これまでの考察から明らかなように、ウイルソン政権はヨーロッパでの戦況と密接に連動しながら、それに対応するために、国内では戦時体制の構築に邁進してきた。そのためには、国全体に「戦争熱」を煽り、さらに、必要ならば、なりふり構わずに、義務兵役制度法、防諜法、そして、煽動罪法を成立させた。その結果、遺憾なことなのだが、熾烈な「国内の戦争」が勃発することになったのである。まず起こったのはドイツ系アメリカ人に対する迫害であった。学校や大学におけるドイツ語教育が禁止され、公立図書館からドイツ語の書物が追放され、さらには、ドイツおよびオーストリアの音楽の演奏が禁じられるといった憂慮すべき事態になったのである。さらに深刻だったのは、防諜法や煽動罪法によって、多くの反体制的な知識人、社会主義者、アナーキストが不当に弾圧され、かれらが関わっていた機関誌が発行禁止処分にあって、結果的に、かれらの言論活動が統制され弾圧されることになったことである。

かくして、国家のなかで闘いが生まれる。戦争は狩る者と狩られる者の間のいわばスポーツになる。その心理的な楽しさという点では、国内での敵の追跡は、国外での敵への攻撃に勝る。国家のすべての恐るべき力が異端者に向けられる。国はしつこい熱病で沸き返る。政府によって、平和主義者、社会主義者、敵である在留外国人に対して、白色テロが実行され、さらに、より穏やかにではあるが、敵と関係していると思われるすべての人々が迫害されることになるのだ。<sup>4</sup>

こうした状況に直面して、リベラルな知識人、社会主義者、アナーキストたちが立ち

上がり、抗議運動を展開した。たとえば、アナーキストのエマ・ゴールドマン（Emma Goldman）であるが、彼女は無政府主義の立場から、一貫して、アメリカの参戦に反対し、さらに、戦争そのものを厳しく糾弾してきた。ここでは E. ゴールドマン自身が編集発行していた雑誌 *Mother Earth* に掲載された *International Anarchist Manifesto on the War* と *The No-Conscription League* という記事を検討することによって、彼女がそうした状況をどのように認識し、対処しようとしていたのかを考えておこう。彼女によれば、原理的には、戦争とは国家が生み出すものであり、避けがたいものである。国家とは、いかなる政体であれ、労働者の搾取、階級闘争を基盤とし、ある特権階級に利益をもたらすために組織された抑圧機構であって、もっぱら法と軍事力によって、その体制を維持しようとするものである。このような国家が行う戦争に対して、E. ゴールドマンが主張するのは「抑圧者に対する、抑圧される者による、搾取者に対する、搾取される者による」「解放の戦争」である。

アナーキストの行動とプロパガンダは、執拗に、忍耐強く、国家を弱体化させ解体することを、反抗心を養うことを、そして、人々や軍隊に不満を喚起することをめざすべきなのである。・・・中略・・・われわれはあらゆる反対運動とあらゆる不満をとらえて、反乱を誘発し、革命を組織して、すべての社会の不正を終わらせるべきなのだ。<sup>5</sup>

さらに、17年5月18日に義務兵役制度法が成立し、J.M. ケラッグのポスターなどの影響もあって、国を挙げて徴兵が実施されることになったわけだが、そうした事態を受けて、E. ゴールドマンはこのように述べている。

良心の自由は人間の権利のなかでもっとも基本的なものであり、進歩の基軸である。人が良心の自由を奪われるとき、同時に、人はすべての思想と行動の自由を失うことになるのだ。<sup>6</sup>

基本的に、人間には良心の自由があり、それに従って、人は殺戮を拒否することができる。一方、徴兵制度とは、原理的に、国家の名の下に、徴兵し、この権利を否定して、敵を殺戮させることである。歴史的に見れば、この二律背反を前にして、なんとか両立させるために、その時々、さまざまな方途が模索され、さまざまな解決策が提示されてきた。たとえば、宗教が絡んできたときなどには、良心的兵役拒否者に対して、例外的に、兵役を免除するかわりに、病院で奉仕活動をさせるといったような対抗処置がとられたこともあった。だが、こうした彼女の主張は、それ自体はそれなりに正当なものであるが、公に広く認められることはなかった。というのも、近代の国民国家においては

— E. ゴールドマンによれば、この国家こそが戦争の元凶であり、解体すべきものであるが — 戦争とは法によって正当化され、行使されるものだからである。具体的に言えば、義務兵役制度法によって戦争は推進され、良心、思想、行動の自由を主張する者は防諜法や煽動罪法によって取り締まられることになる。つまり、E. ゴールドマンに関して言えば、彼女は国家の法により、繰り返し、逮捕され、投獄され、ついには、国外に追放されることになり、雑誌 *Mother Earth* は発禁処分に処せられることになったのである。

それでは、R. ボーンはこの勝算のない戦いにいかに立ち向かったのであろうか。かれは1918年12月22日にインフルエンザに罹ってあっけなくこの世を去ってしまった。32歳、あまりに早く、惜まれる死であった。翌年19年には、*Untimely Papers* が出版された。これは *Seven Arts* の編集者であったジェイムズ・オッペンハイム (James Oppenheim) が編集したものであり、R. ボーンが1917年から18年にかけて、主として、*Seven Arts* などに発表したもの、さらに、17年10月の *Seven Arts* の廃刊後に、書きかけていた未完の論文を収録したものである。

これまで見てきたような異常でヒステリックな状況のなかで、R. ボーンは基本的には「戦争ではなく平和」を、真の敵は「ドイツ皇帝ではなくて、戦争である」と主張し、その立場を貫きながら、言論活動を展開した。その結果、かれはさまざまな苦難に直面し、辛酸を舐めさせられることになったのだが、逆に言えば、まさにそこにこそ、かれの思想の本質があるのであり、それゆえに、かれの思想はつねに生きていて、事あるごとに復活してきて、我々に大きな影響を与え続けているのである。

手始めに、R. ボーンの知識人批判から見ていこう。すでに説明したように、ウイルソン大統領は14年8月の開戦の時点では中立主義を唱えていたが、その後の状況の変化を受けて、17年4月6日に宣戦布告書に署名した。この状況の変化とは、G. クリールらによる「戦争熱」の煽りと、それを梃子にしたウイルソンによる戦時体制構築のことであるが、R. ボーンが『戦争と知識人』や『偶像の黄昏』などにおいて、ジョン・デューイ (John Dewey) らの知識人を厳しく批判するのは、彼らがそうした戦時体制の整備に加担し、結果的に、アメリカを悲惨な戦争へと導いていったからであった。

参戦論は石化したように教条となり、広まっていった。批判は力を失い、感情的な宣伝が始まった。しかしながら、おおかたの社会主義者、大学教授、著述家はこの統合の高水位線にすら達していないのだ。彼らの精神的葛藤はもっと単純に解決されてしまった。民主主義のための戦争というわけだ。これが彼らの哲学の要約であるといってもいいだろう。・・・中略・・・ついに、無責任な行動が始まり、平和の理想と世界を地獄へ引っぱっていく力とを調和させようとする、不安と苦痛に満ちた試みは終わったの

だ。事実を本来あるべき姿に調整しようとする苦悩は終わったのだ。事実を理想として聖別しようではないか。油を塗った滑り台に乗って、皆といっしょに戦争へ。その動きにはますますはずみがついていった。<sup>7</sup>

このように、R. ボーンは戦争に加担した知識人たちを厳しく批判することになったのだが、それは彼らが安易に「精神的葛藤」を解消して、「民主主義のための戦争」を是認し推進してしまったからにはかならない。すでに17年4月6日のウイルソン大統領による宣戦布告書の署名に至る経過は周知の通りであるが、R. ボーンはあくまで戦争ではなく平和を主張していたし、そうした立場から、ウイルソン大統領とそれを支持した知識人たちに批判を加えることになったのは当然の成り行きであった。それでは、その際のかれの基本的な立場とはいかなるものであったのか、『アメリカの戦略の崩壊』に沿って確認しておこう。14年の開戦以降、この戦争に関して、アメリカの、というか、ウイルソン大統領の理想があり、それを実現するための戦略があった。ウイルソンが当初から主張していた中立主義と、それを基盤にした「勝利なき平和」が理想であり、その実現のための戦略とは交渉による平和であった。アメリカが中立主義を表明した時、言ってみれば、連合国と同盟国の間の「調停者」たるべく宣言したのであり、それゆえ、アメリカは「調停者」として交渉に従事し、平和の実現に努力すべきだったのである。アメリカは「勝利」を求める連合国に「勝利なき平和」を説き認めさせるべきであったし、同盟国、とりわけ、ドイツに対しては、潜水艦による無差別攻撃の不当性と無効性を説くべきだったし、ドイツ国内の民主的勢力、つまり、社会主義者たちに平和的な解決を提案し、そのためには、しかるべき代表者に旅券を発行し、ドイツに派遣し、直接説得すべきだったのである。こうした調停は困難な営為だったに違いないが、それでも世界の平和のためには、その「精神的葛藤」と「苦悩」に耐えて、最後まで努力すべきだったのである。だが、現実には、そうしなかった。アメリカは、ウイルソンは、そして、知識人たちはそうした「精神的葛藤」と「苦悩」に耐え切れず、自らをリアリストと称して、現状を「聖別」し、「油を塗った滑り台に乗って」戦争へ雪崩れ込んでしまったのである。

われわれは調停のための力をすべて失ってしまったのだ。われわれは連合国のなかでの民主的なリーダーシップを維持できなかった。われわれは平和のためのイニシアチブを放棄してしまった。・・・中略・・・われわれは連合国の反動勢力を刺激して過激な要求を提示させてしまった。われわれはドイツの民主勢力を打ち砕いてしまった。われわれの戦略は徐々に連合国の戦略となんら違いのないものになってしまったのである。<sup>8</sup>

このように R. ボーンは中立から参戦へと政策を強引に転換させ推進したウイルソン大統領と、それを支持し擁護した知識人たちを厳しく糾弾したのだが、ここで銘記しなければならぬのは、その根底には、単なるテクニカルな政策論だけではなくて、さらに、原理的な国家観があったという事実である。

R. ボーンは死の直前まで、国家に関する考察を推し進めていたが、残念ながら、それは彼のあまりに早い死によって唐突に断ち切られてしまった。その結果、われわれの手元には未完の『国家論』が残されることになったわけだが、それを分析することで、なぜ R. ボーンがウイルソンを、そして、知識人たちを批判せざるをえなかったのかを検証することにしよう。

そもそも国家とはなんなのか、R. ボーンはそこから説き起こしている。通常われわれが関心をもっているのは「政府 (Government)」、つまり、政党の政策や党派的政策論争であり、あるいは、「われわれが生まれ、われわれを世界の特定の市民にし、われわれが逃げるわけにはいかぬ集団」である「国 (Nation)」であって、「国家 (State)」は無視している。「国家」が意識にのぼるのはただ愛国的な祝日くらいである。だが、そんな「国家」が戦争の衝撃によって、「本来の姿にもどり」「威厳に満ちた姿で人々の想像力の中を歩き」始めるのである。そして、R. ボーンによれば、「国家」とは本質的に力・競合の概念である。

「国家」とは政治的単位として行動する国であり、それは力の貯蔵所として、法の決定者として、正義の裁定者として行動する集団である。国際政治は「力の政治」である。なぜならば、それは「国家」間の関係であり、それこそ諸「国家」のまぎれもない不幸な姿であって、戦争では互いにぶつけあう人力・産業力の集団だということなのだ。国が他国との関連で一体となって行動するとか、自国の住民に法を強制したり、個人あるいは少数者に強圧をかけるとか罰を与えるとき、国は「国家」として行動する。<sup>9</sup>

それでは「国家」が戦争状態に入ったとき、「国家」のなかでいったいなにが起こるのであろうか。そのとき国民は「画一的感情、国家の理想を絶対的頂点とする価値体系」をもつようになるのだが、R. ボーンはそれについて次のように書いている。

市民はもはや自分たちの「政府」に無関心ではないし、政治的統一体の細胞の一つ一つが生命と活気に満ち満ちているのだ。要するにわれわれの一人一人がなんらかの形で全体の美德を含む共同社会を完全に実現する途上にあるのである。戦時下の国では、市民の一人一人がすべて全体と一体化し、その一体化により途方もなく力を得たように感じるのだ。・・・中略・・・戦争をしているとき、個人は社会とほとんど一体化する。

個人はすばらしい自信、彼のすべての考えや感情の正しさを直感的に知る。<sup>10</sup>

原理的に言えば、アメリカのような多民族多文化の国では、個人と社会、あるいは、個人と国家が一体化することはなかなかむずかしいことだが、戦争という異常なる状況においては、この一体化が実現し、その結果、個人は強烈な存在感を感じながら、「生命」と「活気」に満たされることになるのである。R. ボーンが、戦争は「国家」の健康であると言うとき、かれが意味しているのはまさにこのような状況なのだが、かれと「国家」との関係を検討してきた者としては、この言葉を文字通りに受けとめるわけにはいかない。ここには、かれの痛切なるアイロニーが込められていることを、われわれはしっかりと認識しなければならないのだ。その真意はおそらくこのようなものであったと思われる。

知識人は、戦争を容認する大衆の一人となる以外に選択の余地はないように見える。だが、再び恐ろしいジレンマが起こる — 現在起こっていることを支持するか、超然として消極的な抵抗をするかである。前者の場合、大衆の中に飲み込まれ、えたいの知れぬ巨大な力の圧力を受けつづけることになり、ものの数にも入らなくなるし、後者の場合、現実の機構の外にいることになり、ものの数に入らなくなるのだ。<sup>11</sup>

ここには透徹した、しかし、悲劇的としか呼びようのない認識がある。戦争という「国家」が健全な状況においては、いかなる者にも「ものの数に入らない」道しか残されていないのである。戦争を「支持」した知識人たちといえども「巨大な車輪の歯車のひとつ」となって「ものの数に入らなくなる」しかないし、一方、E. ゴールドマンのように戦争に「抵抗」した者も「機構の外」にいて「ものの数に入らなくなる」しかないのである。先に、マン・レイがドイツのベルギー侵攻の報に接して抗議の意をこめて描いた『戦争』という作品を紹介したが、かれが先見的に、かつ、的確に、こうした戦争の実体を把握していたのには驚嘆せざるをえない。

R. ボーンによれば、戦争とは「国家」の健康であるが、本質的には、それは、たとえ「支持」しようが、「抵抗」しようが、あらゆる人間の存在を無化し、「ものの数に入らない」ものにしてしまうものなのである。こうした冷厳なる事実を前にすれば、われわれは「精神的葛藤」と「苦悩」に耐え抜いて、平和を選ぶべきであって、たとえ民主主義のためとはいえ、絶対に、戦争を選ぶべきではないのである。というのも、その選び取った戦争とは、人間であれ、民主主義であれ、すべてを「ものの数に入らないもの」にしてしまうものだからである。このような観点から、ボーンはウイルソン大統領や、戦争に加担した知識人たちを批判し糾弾せざるをえなかったのである。そして、これはまさに悲



劇としか言えぬのだが、そうしたかゆえに、ボーンは「国家」への反逆者、異端者として非難され、断罪されることになったのである。

最後に、R. ボーンのために一言申し添えておかねばならない。たしかに、かれは想像を絶するような苦境に追い込まれ、言論活動を封じ込められていた。だが、それに屈することなく、ささやかながら、執拗に、闘いを継続していたのである。『戦いの下で』のなかで、かれはある友人について書いている。彼は建築家の助手をしていて、年齢は30歳前後で、健康で、知的で、理想主義的な若者である。アメリカはすでに参戦し、徴兵令が施行されており、いつ徴兵されてもおかしくない。そんな状況にあって、かれは愛国心から戦争に挺身することはないし、かといって、戦争を強いる国家に反逆し殉教者になるわけでもない。かれにあるのは懷疑であり、シニシズムであって、その結果、かれはあらゆるものにたいして冷淡な態度しかとることはできない。かれはたしかに「国家のなかに存在しているが、国家の一部を成しているのではない」のだ。ここで注目すべきは、R. ボーンが、「民主的な大統領」にとって、この若者の冷ややかなじつと凝視する懷疑は手に負えない危険なものに思えるに違いないと指摘していることである。この若者に、R. ボーン自身を重ね合わせてみてもけして不当なことではないだろう。思い返してみれば、この論集のあちこちで、R. ボーンは良心、懷疑、躊躇、無関心、アイロニーなどについて語っていた。これらは、それぞれが、基本的にはネガティブで、体系化することができず、その結果、正確に理解することは難しい。しかし、これらこそが、「国内の戦争」で打ちのめされ、公の言論活動を停止せざるをえなかったR. ボーンを支えた思想的基盤であった。『戦争と知識人』から一節を紹介して結びとするが、読めば明らかのように、ここには晩年のR. ボーンの思想が凝縮されて提示されているのである。

「非妥協的人間」は、かならずしも国家に対して不忠ではないのだ。かれはかならずしも「不可能なことを主張する人間」ではないのだ。そしてまた彼が戦争に対して冷淡であることは、死の世界のただ中で、熱っぽく教育と芸術と生を指向するものを見方を説き、高揚したエネルギーを発散しているはずなのである。戦争に対して憎しみを抱き続けている知識人は、以前にもまして勇気をもって努力し、戦争反対の訴えを強固なものにするであろう。古い理想は崩れてゆく。新しい理想を鍛えあげなければならないのだ。彼らの知性は遠くたえまなくさ迷いつづけるであろう。彼が最も恐れるのは、はやまって思想を具体化することであろう。<sup>12</sup>

注

1. Randolph Bourne, *Youth and Life*, The Atlantic Monthly Company, 1913, p.12. 井上謙治訳（研究社 1975）
2. Samuel E. Morison, *The Oxford History of the American People*, The Oxford U.P, 1965, p.188. 西川正身監修（集英社）
3. 同上 pp.205-206
4. Randolph Bourne, *Untimely Papers*, B.W. Huebsch, 1919, p.160. 井上謙治訳（研究社 1975）
5. Emma Goldman, *Anarchy! Anthology of Emma Goldman's Mother Earth*, Counterpoint, 2001, p.387
6. 同上 p.398
7. Randolph Bourne, *Untimely Papers*, B.W. Huebsch, 1919, pp.39-40
8. 同上 p.88
9. ランドルフ・ボーン、『社会的批評』（アメリカ古典文庫 20）、p.216. 井上謙治訳（研究社 1975）
10. Randolph Bourne, *Untimely Papers*, B.W. Huebsch, 1919, pp.146-147
11. 同上 p.44
12. 同上 p.46